

# 横芝町山武姥山貝塚出土の縄文晩期浮線文土器群

渡 辺 修 一

## はじめに

1989年度に重要遺跡確認調査の一環として、山武郡横芝町に所在する山武姥山貝塚の調査が行われた。調査では縄文時代後期から晩期の多量の資料が得られ、その成果は報告書としてすでに刊行されている(註1)。とりわけ著名なZ地点に隣接した第1トレンチでは、縄文時代晩期の竪穴建物跡が2棟分検出され、その検出面上や周辺の包含層から出土した遺物については、予想されたこととはいえ、量的にも豊富であるうえに非常に重要なものであった。

筆者は昨年12月、縄文時代終末から弥生時代初頭の土器群の変遷について考える機会を与えられたが(註2)、その準備段階で山武姥山貝塚第1トレンチ出土土器を実見させていただいた。その結果、縄文時代晩期終末に比定される土器の多くが一括性の強いもので、ある時期に限定された非常に良好な資料と思われた。ただ残念なことに報告書では、整理期間をはじめ種々の制約によって資料の提示が不十分にならざるを得なかったようであった。そこで報告書で漏れていた若干の土器を補充し、また一部の土器については再実測させていただくことで、調査担当者であった蔀淳一氏の快諾を得、研究会発表要旨の末尾に掲載した。しかし発表要旨では土器群に対する筆者のコメントを併載することができず、発表の際に口頭で僅かに触れたに留めてしまった。そこで今回、この誌上をお借りして、山武姥山貝塚出土の縄文時代晩期終末の土器群の位置づけについての筆者の考えを述べておきたいと思う。

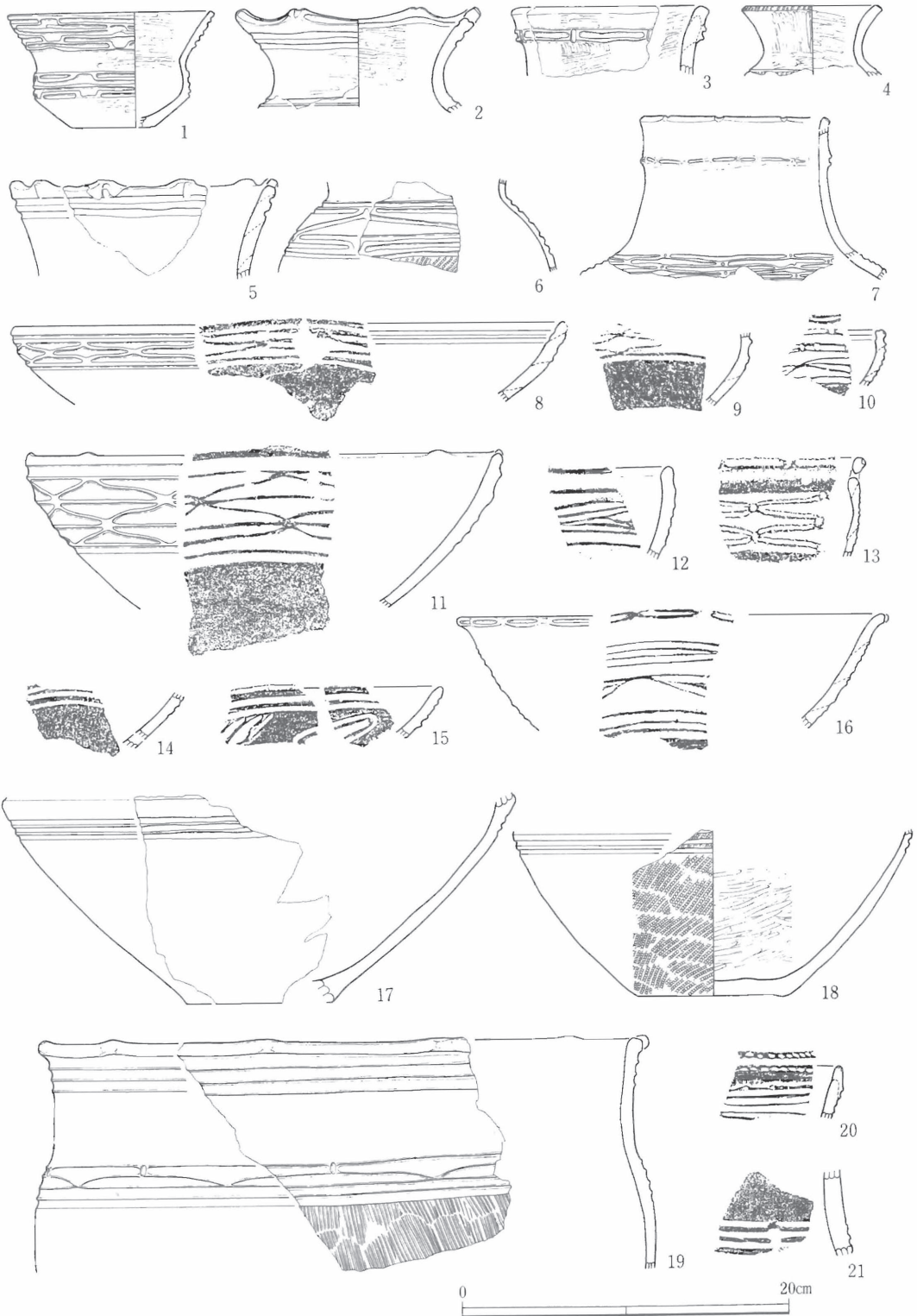
## 1 出土土器

第1トレンチから出土した土器を88個体図示する。勿論出土土器の個体数はこれよりも多い。しかしここに図示しなかったものは小片のみの個体であり、主要なものは一応網羅してある。それらは報告書に記載されていたように、1T-Bと称

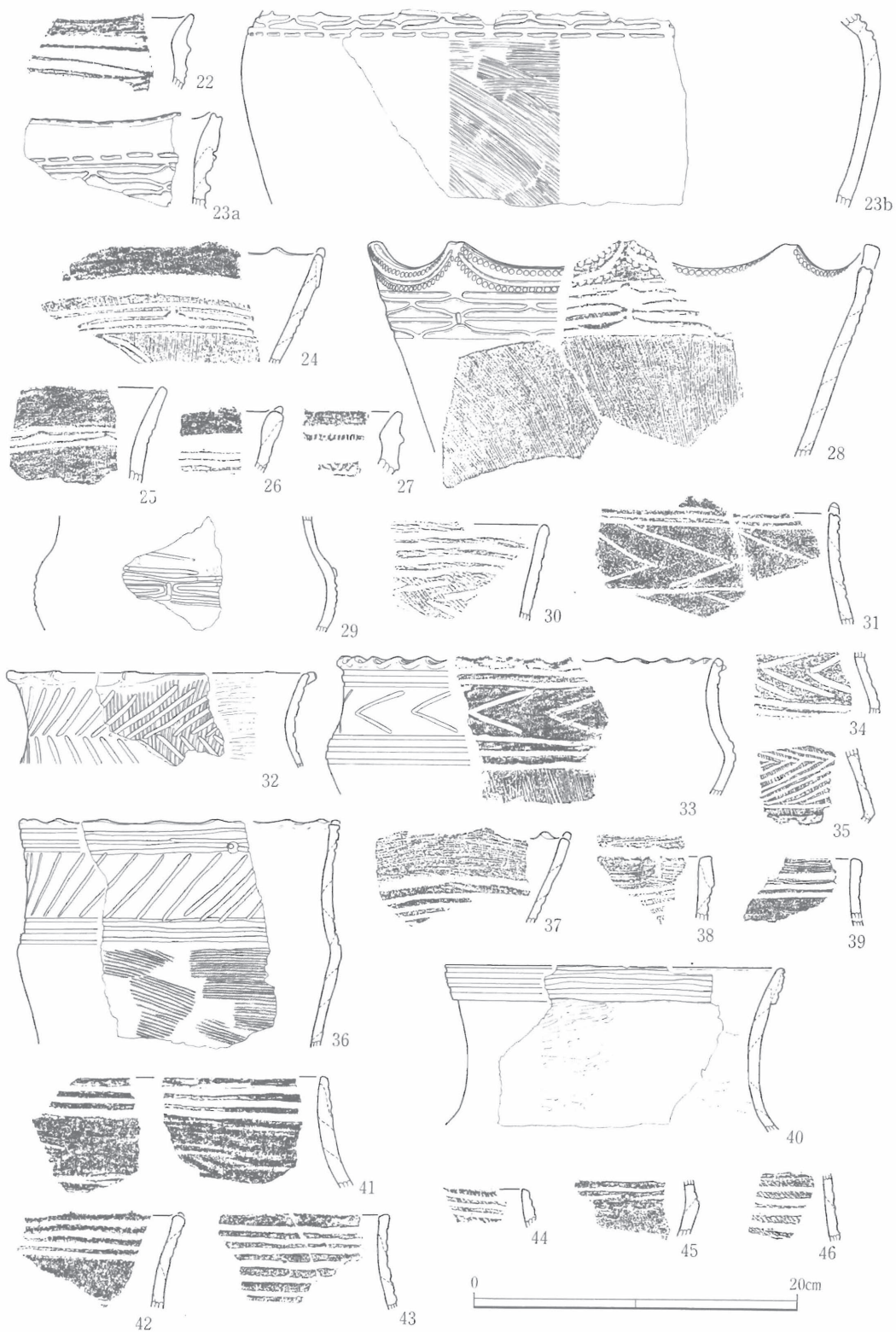
された竪穴建物跡検出面から出土したものを多く含むが、蔀淳一は1T-Bを縄文時代晩期終末の所産であると考えている。

1は小型の鉢形土器である。底部は直線的に開き、胴部下位で屈曲して立ち上がり、頸部でまた「く」字形に屈曲して口縁部は直線的に開く特徴的な器形である。丁寧に研磨された頸部無文帯を挟んで、口縁部と胴部に文様帯をもち、浮線による四字文を連続させる。外面胴部文様帯以上に赤彩。2～7は壺形土器である。2は波状口縁(6単位か)をもつ口頸部破片で、口縁直下の外面に2条、内面に1条の沈線を巡らせ、また頸部下肩部にかけて沈線を巡らせるようである。内外面に赤彩の痕跡が残る。3は外傾の度合いが小さい口頸部で、口縁直下に突帯を巡らせ、突帯上に沈線を施してさらに規則的に縦位の短い沈線で切る。これも外面に僅かに赤彩の痕跡が観察される。4は小径の口頸部で、口端に篋状工具による刻目を施す。また肩部に沈線を巡らせ、おそらく沈線間に刻目(刺突)を施していると思われる。ほとんど痕跡を留めないが、外面は赤彩されていたらしい。5はやや大径の口縁部破片で、8単位かと思われる小突起をもち、口縁直下に2条の沈線を、突起下に縦位の短い沈線を施す。この個体は甕形土器の可能性も否定できないが、一応ここでは壺形土器と考えておく。6は肩部の破片である。肩部文様帯に変形工字文をもち、胴部に縄文(LR)を施している。他の壺形土器とは時期が異なるであろう。7は口端に規則的に刻目をもち、2cm余り下に低い突帯を貼り付けて、突帯上に断続的な沈線を巡らせる。肩部には2分岐ハンガー状浮線網状文をもつが、文様単位連結部には円形の刺突を施す。外面には僅かに赤彩の痕跡が残る。

8～18は浅鉢形土器である。8は口縁のすぐ下に2分岐ハンガー状浮線網状文をもつもので、文様帯幅が非常に狭い。また内面には2条の沈線が巡らされる。9は3分岐浮線網状文をもつと思わ



第1図 山武姥山貝塚1T出土土器1 (1/4)



第2図 山武姥山貝塚1 T出土土器2 (1/4)

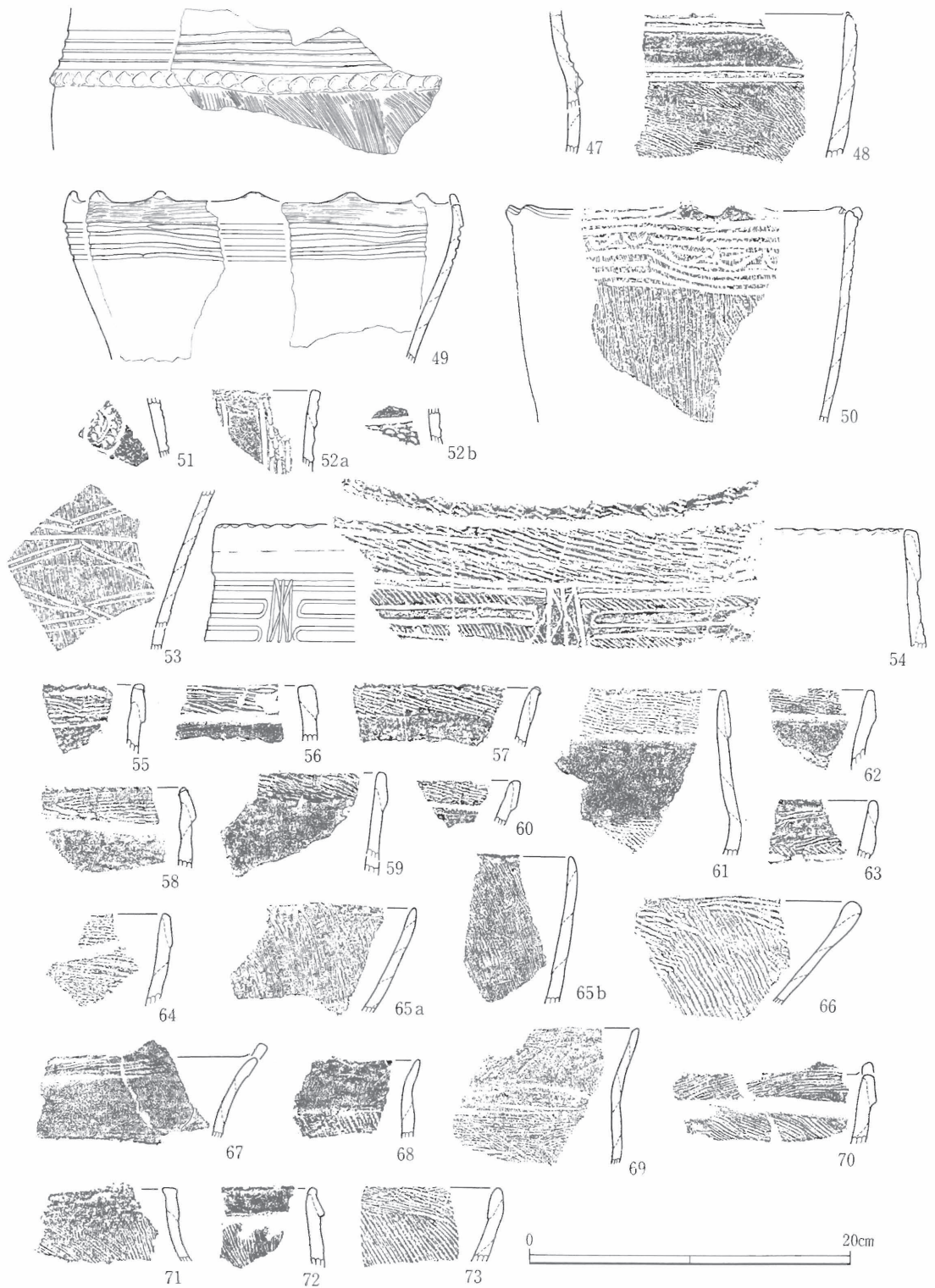
れるもの。10は小型の浅鉢形土器で、13、16とともに口外帯をもつものであるが、浮線網状文を施す文様帯との間の無文帯が発達しない。浮線網状文の構成は充分には把握されない。11は2段構成の3分岐ハンガー状浮線網状文をもつもの。おそらく文様単位に合わせて口端に突起を付加して小波状とする。外面に赤彩の痕跡が残される。12はレンズ状の浮線網状文を有する土器。浮線はきわめて低い。13は2条一単位の浮線でハンガー状、あるいは菱形の浮線網状文を構成する。文様単位連結部に円形刺突が入る。また口外帯下の無文帯は10よりも発達している。14は上位に沈線が巡らされている小片である。15は口縁直下に2条の沈線を巡らせ、その下に沈線で文様を描くが、いかなる構成をとるのか判然としない。断片的に見える範囲では成田市荒海貝塚(註3)及び四街道市御山遺跡(註4)から出土した壺形土器に類似するものがある。なおこの個体にも外面に赤彩の痕跡が観察される。16はレンズ状浮線網状文をもつ土器である。口外帯には断続的に沈線を施し、沈線の切れ目はつまみ上げたように突出させる。外面には僅かに赤彩の痕跡を残す。17は、胴部上位に3条の沈線を巡らせるが、遺存部の上端にも沈線が窺え、そこで屈曲して内傾気味に立ち上がるらしい。外面全面が赤彩される。18も3条の沈線が遺存するもので、地文として縄文(LR)が施されている。やはり外面全面が赤彩されている。

19以下は甕、深鉢形土器で、28までが浮線文を有するものである。19は小波状をなす口外帯をもち、口縁直下に沈線を巡らせて、頸部を無文帯とし、肩部に浮線文による文様帯をもち、文様単位の連結部に縦位楕円形の刺突がある。外面肩部以上は赤彩されたい。胴部には細密条痕が施される。20は口縁部下に浮線文による文様帯を展開する破片で、口端上面と外側に列点をもつ。21は頸部から肩部浮線文帯の破片。22は口縁部破片、構成は不詳であるが、3分岐浮線文が見える。緩やかな波状口縁をなすらしい。23も波状口縁を呈する個体で、口端上面に断続的な沈線を巡らせている。口縁部下と肩部に2分岐浮線網状文による文様帯を有し、頸部は無文帯となると考えられるが、その部分の明確な破片がない。また文様帯の上下にも口縁端部と同様の断続沈線を巡らせるらしい。胴部には細密条痕が施されており、外面文

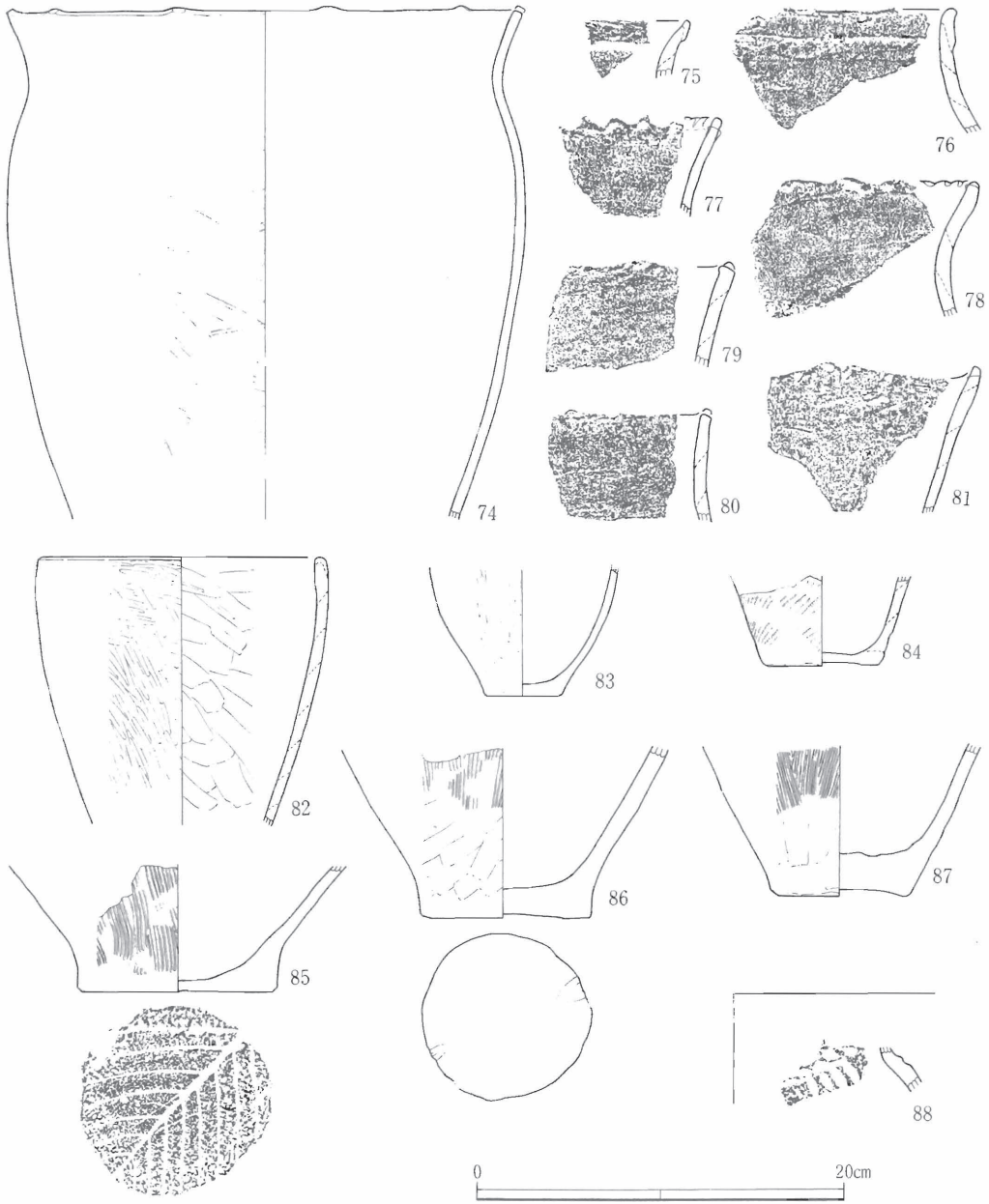
様帯部分に赤彩の痕跡が観察される。24は小突起を持つ口縁部が研磨された複合口縁となり、幅狭の無文帯を挟んで浮線四字文による文様帯となるが、その下位にも沈線による文様が描かれるらしい。浮線文帯の単位連結部には刺突が見られる。地には細密条痕を施し、外面赤彩。25~27も口縁部下に浮線文帯を有する個体であるが、27は幅広の浮線の上に刻目を連続させるもので、便宜上浮線文を施す土器に含めた。28については波頂部が文様単位に合致するとすれば8単位波状口縁に復原される土器で、波状に合わせて沈線を巡らせ、沈線の上下に円形の列点を添わせる。口縁部下の文様帯は連結部に刺突を伴う3分岐浮線文で、やはり施文以前に細密条痕が施されている。

29~54には沈線文様をもつ甕、深鉢形土器を掲載した。29は肩部の文様帯にやや乱れた工字文を描くもので、その上位に方形の突起をもつ。30~36には頸部に羽状文を施す土器を集めた。羽状文の粗密等、それぞれに個性的な特徴をもつ。羽状文帯の上下は平行沈線によって界される個体が多いが、31については1条の沈線を挟んで羽状文帯が二段になるようである。また文様帯の地が研磨されるものと、30のように燃糸文が施されるものや32、35のように細密条痕が施されているものがある。口端の形状も突起を有するものや小波状口縁をなすものなどバラエティーに富む。36は基本的に同じ系統の土器であるが、文様は羽状をなさず、左下がりの斜行沈線のみによって構成されている。この個体の胴部には燃糸文が施される。

37は口縁部下に平行沈線が巡るが、頸部には沈線による何らかの文様が描かれる。38~49は主たる沈線文様が平行沈線のみのものである。口縁部を含む破片のうち、38と40だけが複合口縁をなすが、40は折り返し部に沈線を巡らせるもので珍しい。器形としては47までが甕形土器であるが、多くは粗縁で(42のみ小波状口縁)頸部と肩部に数条ずつの平行沈線を巡らせていると思われる。47については肩部に指頭押捺による刻目を連続させる突帯を貼り付けるが、この類例は成田市殿台遺跡(註5)にある。48と49は深鉢形土器で、48の2段目の2条の沈線以下には燃糸文、49の小波状を呈する口縁部に細密条痕が残される。50~54はその他の沈線文様を有するものである。50の深鉢形土器は口縁部に2つを一単位とする突起をもつ



第3図 山武姥山貝塚1T出土土器3 (1/4)



第4図 山武姥山貝塚1 T出土土器4 (1/4)

器形で、基本的には弧状の沈線を横位に連続させてそれを上下の平行沈線で挟むもの。51は渦文をもつ破片。上から垂下する列点を挟んだ沈線と下から垂直に立ち上がるそれが頸部中位で渦状に組み合わさるのであれば、鈴木公雄が紹介した当遺跡出土資料(註6)にあるが、御山遺跡にも類似品があり(註7)、その例では頸部中位の横位の沈線の端部が渦を巻いている。52は沈線間に刺突を充填するもの。この小片2点では文様構成を知るには

無理がある。53は2条一単位の沈線で菱形文を描くもので、細密条痕が施されている。54は燃糸文を地文として折り返し状複合口縁を有する個体で、口端には絡条体押捺による刻目をもつ。頸部には沈線による杵状文が描かれ、単位間には3条の縦位の沈線と「X」字状の沈線が重ねて描かれている。

55~66は燃糸文を施す個体を集めた。おそらく63までが甕形土器で、頸部が磨かれている。55、

57、58の口端には刻目が施されるが、それらはいずれも棒状工具によるものである。しかし当然ながら、図示しなかった個体には絡条体による刻目も認められる。64は複合口縁をもつ深鉢形土器、65は粗縁の深鉢形土器である。66は口縁部が肥厚する粗縁の土器であるが、著しく外傾し、浅鉢形を呈する可能性がある。器形は若干異なるが、浅鉢形を呈する燃糸文施文の土器は四街道市池花南遺跡でも認められている（註8）。

67～74には細密条痕を施す甕、深鉢形土器を集めた。67は複合口縁をもつ甕形土器で、口頸部が大きく外反し、小突起を付加する折り返し部に細密条痕が施されている。68、69、74は粗縁の甕形土器で、肩部以下に細密条痕が施されるもの。74の口端には規則的に小突起が付加されている。70～73は複合口縁を有する深鉢形土器である。70の折り返し部には細密条痕が施されているが、71、72の折り返し部は研磨され、その直下から細密条痕が施される。73は口縁部の内側に折り返し状複合口縁を有するものである。75～81は無文の甕、深鉢形土器口頸部破片であるが、それらの肩部以下には条痕が施される可能性は充分である。やはり複合口縁をもつもの、口端に刻目を施すもの、緩やかな波状口縁を呈するもの、小突起を付加するものなどバラエティーは豊富である。82は砲弾形の無文深鉢形土器。外面は篋削りの後全面が研磨される。この個体は胎土こそ縄文晩期終末の土器とほぼ共通であるが、より古い段階のものかも知れない。

83～87は底部を集めた。83は小型の壺形土器の底部と思われ、内面は丁寧な指などで、外面は丁寧な研磨で仕上げられ、さらに外面が赤彩されていたらしい。84は無節縄文（L）が施されているもので、弥生中期の土器の可能性はある。85～87は細密条痕が施されている底部である。86、87の下部は条痕を施した後に篋削りで調整されている。また85の底面に木葉痕が、86の底面には2か所の対称的な位置に切り込みが認められる。

88は須和田式の壺形土器肩部破片で、明確に弥生中期の所産と判断される唯一の例である。4条を単位とする沈線で三角連繫文を描き、連結部に複数の刺突を施すものらしい。

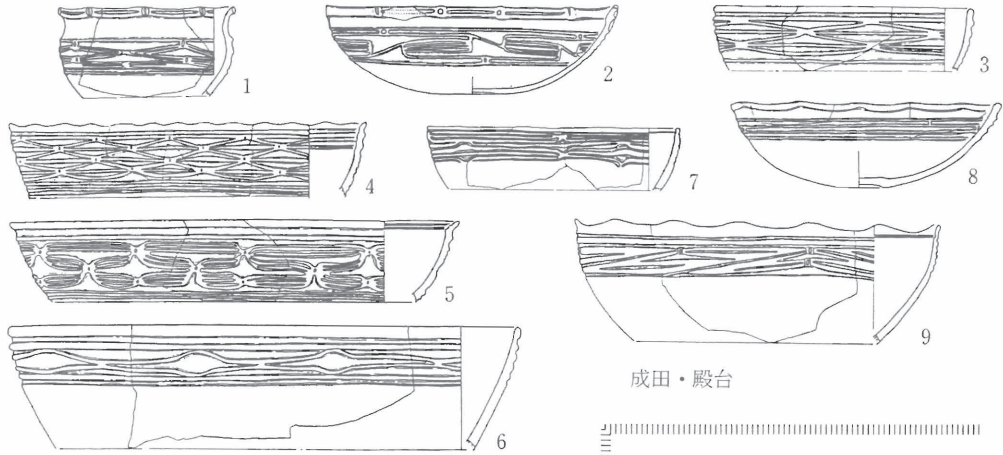
## 2 当遺跡出土土器群の位置

山武姥山貝塚第1トレンチから出土した上記土器群のうちの多くが1T-Bと称された堅穴検出面出土であることはすでに触れた。報告書で1T-B出土とされている土器は、本稿の番号1、6、7、11、16、19、24、25、28、30～33、36、40、48、49、54、56、61、66、69、72～74、82の計26個体である。1T-B出土土器には晩期中葉以前の土器も含まれるが、報告書で図示されているのは12片で、中では前浦式土器が目立つものの時期的なばらつきも大きく、藪が述べているように、1T-Bは本稿で問題とする土器群の時期の遺構であろう。逆にいえば、出土土器群が一括性を有するものである可能性は強いといえる。またトレンチ内から出土した他の土器についても、包含層の形成が、すなわち周辺空間への遺物廃棄行為がおそらくこの遺構構築前後の短時を主体としていると想定され、かなりの部分が一括性をもつと思われる。先に触れた出土土器の中で、積極的に時期が異なると推定できる個体としては51～53、84、88、そして6が挙げられようか。

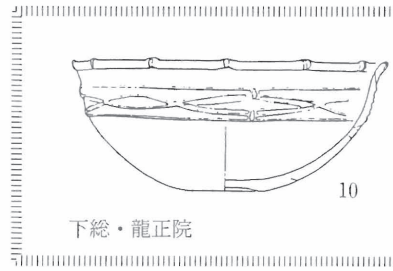
縄文時代晩期後葉～弥生時代初期の筆者の編年観については別稿で概略を述べている（註9）が、それに照らせば、当遺跡出土土器群の主体は筆者の仮称する御山（古）段階に該当することになる。この段階は土器組成に大きな変化、この次の段階を含めて壺形土器の増加と浅鉢形土器の減少という現象が認められ始める時期である。ここで翻って当遺跡出土土器群の組成を見よう。勿論出土量は零細ともいえないまでも、あくまでごく部分的な調査であるので、大略の傾向を知る程度に留まる。またいうまでもなくここで図示しなかった個体を含み、時期が降ると判断される個体は除外する。

壺	6個体（または7個体）
特殊小型鉢	1個体
浅鉢	12個体（うち浮線文7）
装飾甕	41個体（うち浮線文9）
装飾深鉢	7個体（うち浮線文1）
粗製甕	22個体
粗製深鉢・鉢	9個体

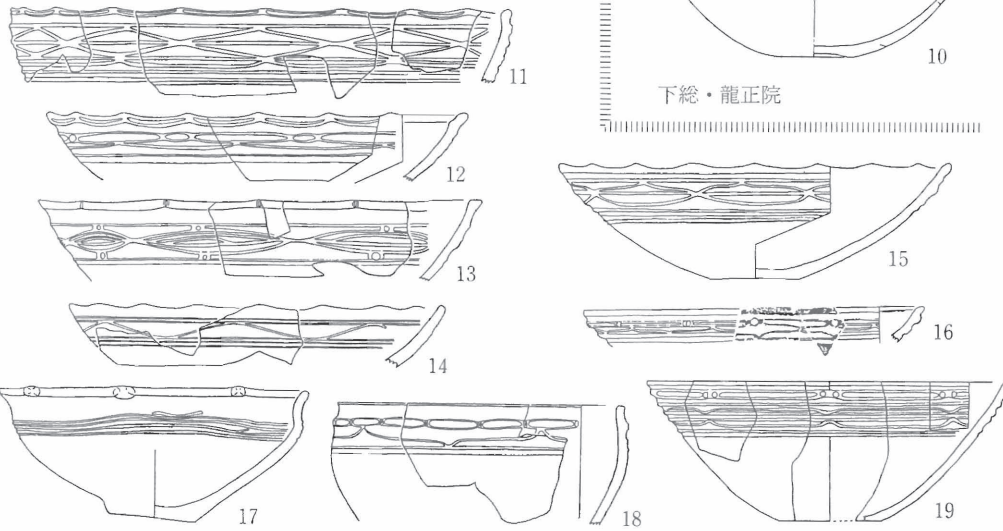
粗製甕、深鉢形土器については胴部のみ個体は除外する。それらは器形の判断が困難であるうえ、個体識別も困難（実際は単体破片が多いと思われる）なため、計上しなかった。破片数から推



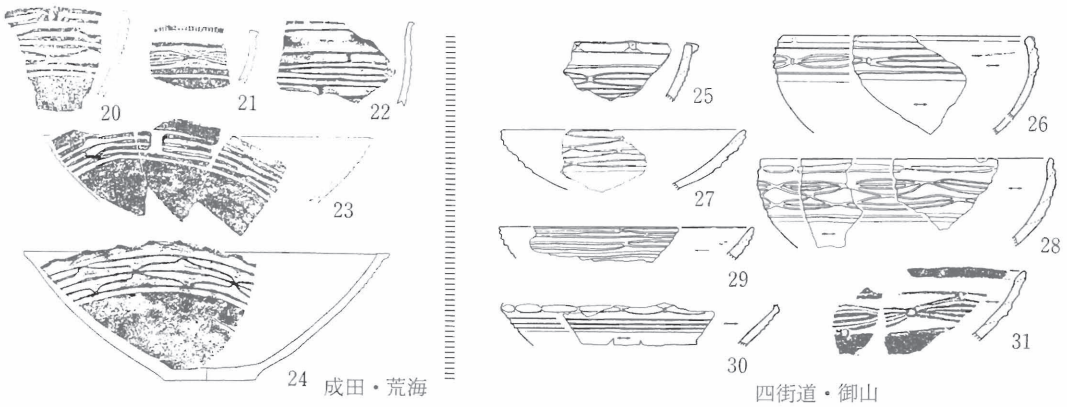
成田・殿台



下総・龍正院



千葉・子和清水



成田・荒海

四街道・御山

第5図 仮称御山(古)段階の浅鉢形土器 (1/6)



定した粗製甕、深鉢形土器の個体数はおそらく上記の2倍程度である。粗製甕、深鉢形土器の個体数を2倍と考えた場合の比率は、

壺	6/129	4.7%
浅鉢・鉢	13/129	10.1%
裝飾甕	41/129	31.8%
裝飾深鉢	7/129	5.4%
粗製甕	44/129	34.1%
粗製深鉢・鉢	18/129	14.0%

これを註2文献で提示した御山遺跡第I・第II地点の組成比率と比較した場合、浅鉢形土器の比率が低いようであるが、浅鉢形土器と壺形土器の対比ではおよそ2:1とほぼ等しくなり、時期が溯る四街道市池花南遺跡よりも壺形土器が相対的に増加しているといえる。また該期の重要な問題の一つに細密条痕の普及、浸透があるが、御山遺跡では捺糸文と細密条痕の比率はおよそ2:1である。量的にはやや零細ながら、下総町龍正院貝塚第III層(註10)では捺糸文と細密条痕の比率は4:1とされている。当遺跡資料では粗製甕、深鉢形土器の破片数を数えた場合、捺糸文68%に対して細密条痕32%でやはり見事に2:1という比率に近くなるのが解る。文様をもつ甕、深鉢形土器の地文について見ると捺糸文6個体に対して細密条痕13個体と、逆に細密条痕が卓越する。この傾向は御山遺跡でも同様である。

仮称御山(古)段階は、浮線文土器群編年の指標的地域である中部高地における水式土器に並行することはまず疑いの余地がない。小諸市水遺跡(註11)と松本市石行遺跡(註12)を基準資料として水式土器の組成を検討した中沢道彦(註13)によると、水遺跡では浅鉢・鉢27.7%、甕・深鉢67%、壺3.9%、石行遺跡では浅鉢・鉢11.3%、甕56.7%、深鉢19.9%、壺7.9%となっている。また中沢は石行遺跡の浅鉢を水式後半期の指標として水式を前後に二分し、水式のうちで浅鉢形土器は半減以下、壺形土器は倍増という組成変化が顕在化することを指摘している。石行遺跡の浅鉢形土器は口縁外帯直下の無文帯が発達したものばかりで、他遺跡と比較、検討した場合、中沢の指摘はある程度妥当性をもつものと思われる。千葉県内の遺跡の場合も、筆者が仮称した御山(古)段階に含められる資料の中に浅鉢形土器の様相差が認められる。

第5図は仮称御山(古)段階の浅鉢形土器を集めたものである。下段にある荒海貝塚、御山遺跡では24のような3分岐ハンガー状浮線文の単段化したもの(これについては鈴木正博により荒海J型三分岐浮線文と命名されている)やこの段階から卓越するレンズ状モチーフが多く用いられ、口縁外帯直下の無文帯があまり発達したものはない。対して上段に置いた殿台遺跡や龍正院貝塚では、椀形を呈して口縁部が外反し、口縁外帯と直下無文帯が発達するものが含まれる。また菱形モチーフを用いることが多くなる。典型例としては1、10があるが、市原市武士遺跡(註14)ではそういった浅鉢形土器が主体となっている。中間に置いた千葉市子和清水遺跡(註15)は文様、器形とも中間的な様相を示しているといえよう。これらの様相差は、いわば水式土器の変化に直接的に影響されつつ、それと連動した変遷を示すとみることも可能である。しかし御山遺跡などではより新しい段階の土器群が出土しているにも拘わらず水式的な土器の典型はあまりみられず、時間差というよりも地域間のあるいは遺跡間の、水式土器の影響の強弱という見方も否定はできない。もしこれらの様相差が時間差を示すものならば、水式の前半には御山遺跡など、水式の後半には武士遺跡などが比定されることになろうが、石行遺跡に認められたような浅鉢形土器比率の減少は顕在化していないように思われる。今後殿台遺跡や武士遺跡の本報告を待って検討されなければならない問題であろう。山武姥山貝塚第1トレンチ出土土器群については、第1図13が水式的な浅鉢形土器であるが、概ね御山遺跡第I・第II地点出土土器群に近い様相を示すものとして理解されよう。

#### おわりに

以上山武姥山遺跡第1トレンチ出土の縄文晩期浮線文土器群についての私見を述べてきた。いずれにしるこの時期は、水式土器の成立と変化に連動して弥生文化の影響が及ぶ重要な時期である。当地の縄文土器組成の解体と弥生文化の成立に関して水式土器の果たした役割は非常に大きい(註16)。しかし前節最後に述べたような検討課題もあり、まだ該期の整然とした理解には程遠い。今後も資料の十分な検討とさらに緻密な考究を重ねる必要性を痛感する。

- 註1 蔀淳一『横芝町山武姥山貝塚確認調査報告書』(助千葉県文化財センター 1990)
- 2 渡辺修一「南関東地方における畿内第I様式並行期の土器群とその変遷」『第1回東日本埋蔵文化財研究会 東日本における稲作の受容』 1991
- 3 西村正衛「千葉県成田市荒海貝塚(第1次調査)」『学術研究』23 1974  
西村正衛「千葉県成田市荒海貝塚(第2次調査)」『学術研究』24 1975
- 4 註2文献第3図24
- 5 寺内博之・喜多圭介・他『成田市郷部北遺跡群調査概要(加定地・殿台遺跡)』成田市郷部北遺跡調査会 1984  
藤下昌信・喜多圭介・寺内博之「千葉県成田市殿台遺跡の調査」『奈和』22 1984
- 6 鈴木公雄「関東地方」『縄文土器大成』4 1981
- 7 註2文献第4図22
- 8 渡辺修一『四街道市内黒田遺跡群』(助千葉県文化財センター 1991)
- 9 渡辺修一「縄文から弥生へー土器群の変遷(予察)ー」『四街道市内黒田遺跡群』(助千葉県文化財センター 1991 及び註2文献)
- 10 柿沼修平・青木幸一「千葉県下総町龍正院(大原野)貝塚の調査」『奈和』21 1983
- 11 永峯光一「氷遺跡の調査とその研究」『石器時代』9 1969
- 12 竹原学・関沢聡・他『松本市赤木山遺跡群II』松本市教育委員会 1987
- 13 中沢道彦「中部高地の動向」『第1回東日本埋蔵文化財研究会 東日本における稲作の受容』 1991
- 14 整理中。加納実氏、高柳圭一氏のご厚意に

より資料を実見させていただいた。

- 15 田中英世・他『子和清水遺跡・房地遺跡・一枚田遺跡』(助千葉市文化財調査協会 1987)
- 16 氷式土器の影響を考慮すべき事象は多い。

筆者は細密条痕の普及も氷式土器の影響を無視できないと考える。細密条痕は福島県地方においては早くから卓越しているが、千葉県では池花南遺跡の段階でも燃糸文しかみられず、氷式土器の影響が及ぶ次段階で細密条痕が普及し始めるのである。

また鈴木正博は荒海式土器における雑書文の起源を氷式土器の稲妻状文に求めている。荒海式土器の雑書文が頸部文様であるのに対し、氷式土器の稲妻状文が胴部文様であるため、両者は結びつかないとする考え方もあるが、時間的な連続性を考慮した場合、雑書文(その一部か)の祖形を氷式土器の稲妻状文に求めるのは現在のところ最も妥当性のある見解といえよう。

鈴木正博「栃木「先史土器」研究の課題(2)」『古代』91 1991

稲妻状文は御山(古)段階では武士遺跡と山武姥山貝塚にみられる。次段階で荒海貝塚や殿台遺跡の甕形土器頸部文様に採用されてさらに後段階に菱形文として盛行するのではないか。山武姥山貝塚第1トレンチ出土の稲妻状文が施された小片を下に示す。甕形土器胴部上位の破片で、地文は燃糸文。(1/2)

